



赤ちゃんに多い、新しいタイプの食物アレルギー

東海大学医学部総合診療学系小児科学教授

山田 佳之

一般的な食物アレルギーは、鶏卵・牛乳・小麦などが原因となることが多く、患者さんの80%以上が乳幼児です。反応は通常、摂取後2時間以内に起こる「即時型」と呼ばれるタイプで、皮膚症状（じんましんや赤みなど）が最も多く見られます。

アレルギーの診断には、特定の食物に対するIgE抗体（例えば「卵白IgE抗体」）を調べる血液検査が一般的に行われ、多くの場合、数値が高くなります。これは、マスト細胞という免疫細胞がIgE抗体を介して食物抗原（アレルゲン）を感知し、ヒスタミンなどの化学物質を放出して症状が出るためです。

一方で、2000年ごろから、ミルクを飲んだ新生児や乳児に、嘔吐や血便など腸の炎症による症状が見られるケースが増えてきました。さらに2010年代後半からは、離乳食で卵黄などの固形食を食べたあとに、嘔吐を繰り返す乳児が急増しています。これらのタイプは「消化管アレルギー」と呼ばれることが多く、正式には「食物蛋白誘発胃腸症」という疾患グループになります。特に、摂取後2～3時間してから急に嘔吐を繰り返す「急性食物蛋白誘発胃腸炎（FPIES：エフパイイスと呼ばれます）」が注目されています。FPIESなどの消化管アレルギーでは、IgE抗体が関与しない「非IgE依存性」のことが多く、血液検査でIgE抗体が陽性となるのは3割程度にとどまります。また、症状の出現が遅く、「非即時型アレルギー」と分類され、下痢や血便などが遅れて現れることもあります。さらに、急性期の嘔吐には、通常食物アレルギーで使用するアドレナリン筋肉注射は効果がないとされており注意が必要です。FPIESには国際的な診断基準があり、最近では、一般の小児診療でも広く知られるようになってきた疾患ですが、診断が難しかったり、対応に迷うケースも少なくありません。こうした場合は、アレルギー専門医に相談されることをおすすめします。

